

【ポスター発表】

中学生のスマホ依存への発達軌跡変化類型に関する研究

縦断的变化類型と多次元の弊害を中心に

パクヒョンジュ
○全北大学校・社会福祉学科 朴 亨 主
イスビ
李受肥(全北大学校)

[キーワード]: 中学生, スマホ依存, 潜在成長階層分析

1. 研究目的

最近、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響下で、オンライン授業への展開やソーシャル・ディスタンスなど、対面する機会が減ったためにスマホやデジタル機器の使用が増え、コロナ以後青少年のスマホ依存比率が大きく増加されたという。(統計庁, 2021) スマホ依存は時間が進むにつれてより深刻になっていく特性があり、その結果に差があるので、これを考えて中学生を対象に時間の経過とともにスマホ依存の異質な変化の様相がどのように違って現れるのかを調べるとした。また、この変化の様相によって青少年層の心理情緒、身体発達、学習態度、精神健康など多次元の弊害様相の差を調査し、これに実践的な介入方法を模索したい。

2. 研究の視点および方法

本研究は、韓国児童青少年パネル調査(KCYPS)の2018のうち1パネルのデータ3カ年度(2018-2020年)の主要変数に全問回答した総2,239名の青少年を分析に活用した。本研究は、Stata統計プログラムを用いて中学生のスマホ依存の変化の様相を確認するため、潜在成長階層を分析した。その後、変化類型によって最終的に多次元に弊害の差がどのように現れるのかを分散分析と事後分析によって調べた。

3. 倫理的配慮

この研究は日本社会福祉学会の研究倫理規程を遵守して行われた。

4. 研究結果

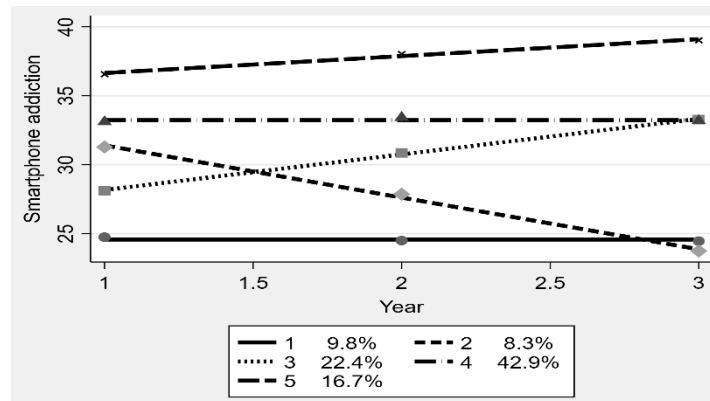
4.1. 調査対象者の一般的特性

まず調査対象者の特性を調べた結果、性別は男性53.7%、女性46.3%であり、地域は大都市41.5%、中小都市43.6%、邑面地域15.0%であった。

全体調査対象者となった中学生の各時点別スマホ依存の平均は、1次年度31.6、2次年度32.3、3次年度32.6となり、全体的に時間の経過とともに平均が僅かに増加したことが分かる。

4.2. 潜在階層成長分析による中学生のスマホ依存の変化類型の分類

潜在階層成長分析により、中学生の中で時間の流れによるスマホ依存の最適な変化の様相を調べる潜在階層の数を定めるために、対数尤度(log likelihood, AIC, BIC, SABIC)などを考慮して5つの潜在階層に分類したモデルを最終的に決定した。図1に5つに分類された潜在階層の変化の様相を示した。このような変化の様相の特徴を考慮して、もっとも低いレベルを維持する「低レベル維持群(class 1)」、中レベルで減少の様相を見せる「中レベル減少群(class 2)」、中レベルで増加する「中レベル増加群(class 3)」、中上レベルで維持する「中上レベル維持群(class 4)」、高レベルで増加する「高レベル増加群(class 5)」と名付けた。



〈図1〉 潜在成長階層の推定グラフ

4.3. 中学生のスマホ依存の変化類型別弊害様相の差

最終潜在階層成長の分析により分類されたスマホ依存の5つの縦断的变化類型の潜在成長階層によって身体発達、心理情緒、精神健康などの全般的な日常生活にどのような差があるかを確認した結果、身長 ($F=5.65, p<.001$) と体重 ($F=6.07, p<.05$) でスマホ依存の変化類型間に有意差が認められた。主観的な健康状態 ($F=10.12, p<.001$) は事後検定結果、高レベル増加群が他の変化類型に比べて主観的な健康状態が悪かった。また、学業態度での無気力 ($F=50.02, p<.001$) は、低レベル維持群から高レベル増加群の順に有意に高く、高レベル増加群で最も高値が認められた。サイバー攻撃性 ($F=8.14, p<.001$) と睡眠の質は、変化類型間に有意な差が認められ ($F=14.56, p<.001$)、事後検定結果では低レベル維持群と中レベル減少群でもっとも睡眠の質が高く、続いて中レベル増加群、中上レベル維持群、高レベル増加群の順になった。生活の質 ($F=26.68, p<.001$) と幸福感 ($F=8.74, p<.001$) でも、スマホ依存の変化類型間に有意な差があり、憂うつ ($F=73.41, p<.001$) は低レベル維持群から高レベル増加群の順に有意に高かった。最後に、社会的萎縮 ($F=49.46, p<.001$) は事後検定結果、高レベル増加群と中レベル以上の増加及び維持群、中レベル減少及び低レベル維持群で有意な差が認められ、高レベル増加群で高い平均を示した。

5. 考察

本研究の主要結果は、第一、中学生のスマホ依存の変化の様相は総5つの類型にまとめられ、それぞれ集団の特徴的な様相に基づいて「低レベル維持群」、「中レベル減少群」、「低レベル増加群」、「中上レベル維持群」、「高レベル増加群」と名付けた。第二、分類された5つの類型によって身体発達、日常生活全般、心理情緒など、全般的な生活でどのような差が現れるのかを確認した結果、「高レベル増加群」で身長と体重、主観的な健康状態、睡眠の質、生活の質、幸福感が相対的に有意に低く、学業態度の無気力、サイバー攻撃性、憂うつ、社会的萎縮は有意に高かった。これにより、「高レベル増加群」の青少年層で多次元的に弊害水準が高かったことが分かった。従って、発達過程にある中学生のスマホ依存を効果的に減少させる政策的・実践的な対策を急がなければならないと考えられた。

参考文献

- 統計庁 (2021). 2020年青少年統計
 National Youth Policy Institute (2021). *Korean Children and Youth Panel Survey 2018*; Sejong, Korea.
https://www.nypi.re.kr/contents/mainpage.do?srch_mu_lang=ENG